

処刑待ついのち愛しむ^{いと}

「遺愛集」に見る島秋人の短歌

高橋 実

初めに

今年平成三十年七月十五日、二十六日に分けて、オウム真理教関係死刑囚十三人の死刑が執行された。一度にこうした大量の死刑囚の執行は珍しいという。今年は死刑執行が一つの大きなニュースになった年と言える。これが筆者にとって、改めて死刑という制度を考えるきっかけとなった。このニュースを聞いて、柏崎出身で三十三歳で死刑が執行された歌人島秋人の事が思い出された。そして書棚の奥にあった島秋人の歌集「遺愛集」を取り出して読んでみた。この本を買ったのは、いつの事だったか、今では思い出せない。

奥付には「昭和五十九年新装第六刷発行」とある。それ以後の事は確かだ。

青少年時代貧しく、病気にさいなまれ、東京で放浪生活を続け、底辺の生活の中で犯罪を犯し、人を殺め、死刑を宣告された島秋人は、中学の先生だった吉田好道氏の一言ですっかり人格は変わった。おのが罪を悔い改め、透き通るような歌を作り続け、見事に処刑台の露と消えた。オウムの大量殺人を犯して死刑台に上った人たちはどのような心境だったのだろうか。このニュースを見て、島秋人を思い出した。

島秋人とは

島秋人とは、どんな人物だったのか初めての人にためにお話ししておこう。本名中村寛、旧満州に生まれ、一九三四年、現在の北朝鮮に生まれ、一家は終戦とともに父の故郷、柏崎に引き上げてきたが、父親が警察官をしていたため、戦後公職追放に合い、母親は結核で幼児のうちに亡くなった。昭和十九年故郷へ帰ってきた時、島は小学校四年生だった。自身も様々な病気で、学業成績も不良だった。中学を卒業後、非行に走り、上京して放浪生活、強盗殺人未遂や、放火などで、刑務所に入れられる。一九五九（昭和三十四年）新潟県小千谷市桜町一三九六番地杉山幸治に押し入り、家の主に重傷を負わせ、その妻を絞殺する。よく昭和三十五年新潟地方裁判所長岡支部で死刑判決。服役中恩師夫妻に勧められ、短歌を作るようになる。恩師夫人吉田絢子さんから「島秋人」のペンネームを贈られる。以後精力的に作歌活動に励む。一九六七年、昭和四十二年十一月死刑執行。三十三歳だった。歌集「遺愛集」は死後出版された。

島秋人の故郷柏崎

島秋人の故郷新潟県は、日本海側のほぼ中央部にある。その南西部に柏崎市があり、商工・経済の中心部として。海に面した柏崎、その背後に米山がある。島秋人はその柏崎市島町（現西本町）に少年時代を過ごした。ねまり地藏、番神岬、香積寺、八坂神社などが島の遊び場所だった。

亡き母に触れる唄なり獄の夜の故郷の人の唄ふを聞きつ

佐渡おけさ唄ひ終へたる人が云ふ故郷のなまりを獄に聞き入る

雨多き越後ふる里恋しきにあめふりつづきいよいよよまさる

春の日の番神岬の浜にみて日昏ひもじく聴きし鐘恋ふ（死刑囚 島秋人） 138頁

車窓過ぐる故郷見れば幾度もガラス拭きくるる老いし看守は（50頁）

罪の身の死ねばさびしく骨鳴らし遠き鉄路を故郷に走るや（同）

故郷遠く離れた人が故郷を恋しがるのと違うのは、刑務所という自由を奪われた場所で

読む望郷の歌である。しかもいつその故郷と別れなければならぬ切羽詰まった目で見ると故郷である。車窓から見える故郷、これが見納めか付き添った看守が幾度もガラスの曇りを拭いてくれるという。手の自由を奪われている島に看守のやさしさが身に染みる。

島秋人の手紙

島の歌集「遺愛集」には、次のような島の手紙が掲載されている。これらの手紙は、これが小中学校時代「低能」と言われた島の手紙であろうかと思われる心情溢れた名文である。昭和三十五年十月五日 吉田好道宛
昭和三十六年一月十三日 吉田好道宛の手紙で島は次のように書き送っている。この書簡を見ると、島が好道の妻吉田絢子の影響をいかに強く受けたかが強調されている。島の心情あふれる書簡である。

死刑囚と云われ、又歌を詠む様になつてから未知の方から今日まで幾通かのお手紙をいただき、現在もいただいで居る方もありますが奥様ほど僕の心に近づいて来てくださり、理解し、教えて下さるお手紙はありません。僕が死刑になつた後、遺してゆくものをお読みいただく事が出来たらいかに奥様のお情によつて僕の心が変化したかおわかりと思います。奥様は僕に短歌をあたえて下さいました。国民学校の時より低能あつかいをされて来た人間が社会の中へ入つて行つても決して居ないと云う事を短歌によつて知り、宗教を信仰できない僕の心の灯となつている短歌を奥さまは与えて下さったのです。(遺愛集 21頁)

昭和三十六年二月 吉田夫妻宛 (「死刑囚島秋人」七十三頁)
昭和三十七年五月二十一日 窪田空穂宛
昭和三十七年十一月二十八日 前坂和子宛
昭和三十七年十二月四日 前坂和子宛
昭和三十八年六月七日 窪田空穂宛
昭和三十八年六月十五日 窪田空穂宛
昭和三十八年十二月四日 窪田空穂宛
昭和三十八年十二月二十七日 吉田絢子宛
昭和三十九年四月二十一日 窪田空穂宛
昭和三十八年五月六日 窪田空穂宛
昭和三十八年五月十日 窪田空穂宛
昭和四十年二月二十三日 前坂和子宛
昭和四十年八月二十八日 前坂和子宛
昭和四十年十月三十日 窪田空穂宛
昭和四十年十二月二十一日 前坂和子宛
昭和四十一年十二月二十一日 窪田章一朗
昭和四十二年十一月二日 中村徳次出し 吉田好道夫妻宛
(「死刑囚 島秋人」 十三頁)

島秋人の生と死

島は昭和三十五年三月死刑がきまり、執行が昭和四十二年十一月二日だった。その間七年間のように思い、どのように過ごしてきたのだろうか。死刑判決が出てどんな気持ちだったのだろうか。死刑判決がかえつて島の心を「身に深む安らひ」と詠む。限られた命という思いが歌を詠ませ、悟りの境地に変えた。命絶たるる今「よく生きてうれし」と詠む。

- 1、 刑死待つ朝あさ愛し金網の目のひとつに見つむ紅ばらの群 136頁
- 2、 処刑死をおそれし夢よ覚悟なく今ある生命独り愛しむ 136
- 3、 処刑なく一年過ぎて夏物はいらぬと決めしその夏は来ぬ 136
- 4、 ばら紅き獄庭を見てをりほんたうに今年限りの夏かも知れぬ 136
- 5、 ひぐらしに愛しき憶ひ新たなり処刑なく生き六年たちぬ 138
- 6、 ある限り生命愛しみ処刑死の覚悟あらねどよく生きたかり 139
- 7、 身に深む安らひ愛し笑みてゐるころの外にわが生命なし 140
- 8、 身に深む安らひ愛しよく生きてうれしき事を詠みて足りぬ 140
- 9、 足らふ身と足りて生きたり秋草の遠からぬ死にころ正して 140
- 10、 歌詠みて悟り得し今の愛しきは死刑あらねば知らざりし幸 156
- 11、 いのちありて今し覚めたり愛ほしき澄ませば聴ゆる雨の音なり 158
- 12、 夜の冷えを優しと思ふ幸を得ていのちたたる日は迫るなり 165

父母への思い

わが子が死刑囚となった親や兄弟の悲しみはいかがであろうか。その気持ちは自らの悲しみに跳ね返ってくる。親にいくらわびても詫びすぎることはない。母は栄養失調がもとで、昭和二十四年十二月に死んだ。島が十五歳の時だった。島が死刑囚となることなど予想だにできなかったであろう。父親や弟妹たちは島の亡き後、柏崎を離れ、三条に移り住んだ。父中村徳次は島の死後六年生きて昭和四十八年死んだ。

- わが罪に貧しく父は老いたまひ久しき文のさかさなる 42
- 老い父に刑死の後のかなしみを詫びつつ冴えし虫の音聴きある 40
- 老父よりの手紙は余白多かりき要件のみの字を読み更く 72
- 亡き母に叱られたくてまみつむりひくく飯皿ならしてみたり 98

野の花・小さな命を愛おしむ

野の花鳳仙花・朝顔・紫苑などの花々や蜂・黄金虫・身の回りの昆虫も島の愛情が注がれていた。どんなものでも命を持ち、生きている。そこにもある命の尊さを島は愛しんだ。それは消えてゆかねばならぬ自らの命への慈しみからであった。

- 1、 朝顔のひとつに露のあふれみて葉かげの紅の鮮かなりけり 95
- 2、 虫の音はますます澄みて死ぬるべきわれのひと夜をいたはりくるる 96
- 3、 春天の澄み極まれる獄窓に来て尻振る蜂のいたく愛しき 148
- 4、 不具の鳩雨水溜りに一羽来て静かに横になりて水浴ぶ 149
- 5、 ながらへる花のいのちの愛しさに都忘れのむらさき淡し 149
- 6、 くちなしの花の白さは絵草子の夢二がゑがく少女にも似る 150
- 7、 わが寝れば閉づる掌と知る文鳥の足の指に来てわれとひるねす 157
- 8、 珍しと土に転べるこがねむし手足うごくに拾ひて来たる 159
- 9、 文鳥の欲り食むままに飯置きて食みあきるまで眺めてゐたり 162
- 10、 鳳仙花紅く咲くなりうら盆の自生の花にころ澄みゆく 192
- 11、 野の紫苑金木屋に茶の花と欲しき日なりき雨冷えて降る 196

養母千葉てる子への思い

養母千葉てる子は、島の願いを聞き、養女として戸籍手続きをなし、島の死後、遺体の

引き取り人となった。「毎日歌壇」の島の歌を発見したのが、島に近づいた動機になったという。だという。今も島の遺骨は、千葉の故郷宮城県築館町に眠っている。島は昭和四十年三月の「遺愛集」あとがきに

最近私は養母を得た。死後に角膜を差し上げること、死体を役立てるために必要な事によって養母になってもらった千葉てる子と云う人は、長い間私の義姉として、キリストを信じさせてくれ、いろいろなわがままを聞いてくれたひとであり、私にとって生みの母におとらない母である。私は心のままに「おかあさん」と書いて手紙を出している。誠に幸せに余る日日を過ごしている。

母を得て感じる事は自身の罪の重大さである。母を亡くした被害者のお子様に対するお詫びであり、死をもってするお詫びでありながら、足りない申しわけないこと、詫びてすまない日日の悔悟であり、人の、すべての生あるものの生命のいかに尊いものかを悟らされたことである。(207頁)

と島は書いている。

わが養母は未婚のままに養母となり母のよろこび深しとありぬ 131

養母あての母と云ふ文字をさな児の甘える如くふみ書き付く 132

障害もつ鈴木和子

死刑囚の身に同情して代わりに何人かの女性がいた。その一人が難病を抱えた盲目の鈴木和子だった。その鈴木と体を触れる妄想を描き続けていた。三十三歳の島は女体に触れることなく、刑務所の壁の中で過ごす身となった。その性欲のはけ口は妄想の中しかなかった。

次の唄はそうした仮想体験から噴き出た歌であった。

- 1、童貞の身のさびしさにこほろぎの澄むこゑ愛し寝返り打てば 198
- 2、触れ得ぬも君愛ほしくこゑひくく呼ぶ夜を獄庭にこほろぎは鳴く 199
- 3、神は汝もわれも知らさば許されむ恥かしきほど燃えゆく日々を 199
- 4、君とわれ触れあふ日なき愛に燃え心添ひつつ清められたり 200
- 5、燃えるとも濡れるともある盲目病む君の可愛ゆきカナの手紙読む 200
- 6、むつみあふことなき愛に秘花濡れて素直に君は妻と云ひ添ふ 200

島秋人を後世に

この島秋人の存在を長く後世に伝えたい。そのためには、歌碑を建てて残したい。しかし、死刑囚の歌碑にさまざまな抵抗があるに違いない。歌碑建立の運動は茨の道かもしれない。

ここで、大逆事件の死刑囚小千谷の内山愚童に思いを馳せたい。平成二十五年十一月十六日、新潟県小千谷市で、『内山愚童師顕彰碑』の除幕式が行われた。百年の昔、明治の終わり、大逆事件に連座して、処刑された内山愚童を偲び、その事蹟を振り返り、発電所ダムの中道ポケットパークに顕彰するために建てられた。天皇暗殺を企てたとして、幸徳秋水を含む十二名の無政府主義者・社会主義者が処刑された大逆事件は、現在では、明治政府による冤罪事件とされ、日本各地で事件関係者の再評価、名誉回復が進められている。

小千谷出身の愚童は、当時、箱根の一寒村、大平台の曹洞宗林泉寺住職を務めながら、仏像彫刻や箱根細工の内職により、檀家の小作人とともに独立自活・相互扶助の実現を目指す。その一方、次第に社会主義への傾倒を深め、天皇制を批判する「無政府共産」を秘密出版し、逮捕され、獄中のまま大逆事件に連座することとなる。小千谷の町を見下ろす山本山の丘の上には、『内山愚童師顕彰碑』と並び、関東大震災で官憲、軍隊により虐殺され

た『平澤計七の碑』が立つ。

島の歌碑建立にはまず「島秋人を顕彰する会」（仮称）の結成が最初である。そこで募金集めを初め、顕彰事業のすべてを取り仕切ることになる。歌碑と共に顕彰の書物出版、歌碑を建てる場所、刻む歌の選定、秋人の自筆歌稿さがし、刻む文字など様々な仕事がある。私としては、歌碑に刻む歌は候補として次の二首を提案したい。除幕式には秋人に殺された小千谷市の杉山家の子孫の参列も要請したい。

1、この澄めるころ在るとは識らず来て刑死の明日に迫る夜は温し（辞世の歌）

刑死が明日に迫る日、「温し」という言葉は重い。悟りきった言葉であろうか。この心境にはとても理解しがたい。

2、罪の身の死ねばさびしく骨鳴らし遠き鉄路を故郷に走るや

島秋人の命よ永遠なれ。

あとがき

平成三十年十一月十五日、柏崎文化協会副会長阿部松夫氏と筆者の大学の同期で吉田好道先生とも同僚だったという古川眞一氏と島のゆかりの地旧島町（現柏崎市西本町三丁目）を案内してもらい、香積寺、ねまり地蔵、八坂神社、鶺鴒橋などを訪ねることができた。また十一月十九日桜町の被害者宅を訪ねた。表札は鈴木幸一となっていた、奥様に訪ねると事件の事は知らないという事だった。後に電話で何も話すことがないと知らされた。これ以上取材はできないと思った。

参考

『遺愛集』島秋人 東京美術 昭和49年

『死刑囚 島秋人 獄窓の歌人の生と死』梅原卓 日本経済評論社 2006年

『アキト』東国原英夫（そのまんま東）一人芝居 DVD (有)青踏舎